

「絶対無の場所」と「純粹知覚」

中村昇

西田幾多郎は、ベルクソンの時間論について、折に触れ批判的に言及している。ベルクソンのいう「持続」は、「連続」のみであり、「非連続」の契機がないという。例えば次のようにいう。

「真の生命というべきものは、ベルグソンの創造的進化という如き単に連続的な内的発展ではなくして、非連続の連続でなければならぬ。死して生まれるということではならぬ。生命の飛躍は断続的でなければならぬ。」（「私と汝」）

西田によれば、時の流れというのは、たんに連続的に流れているのではない。「絶対無」が恒常的に導入されることによって、非連続の連続として「流れる」ものなのだ。西田の時の流れの根柢には、ベルクソンが『創造的進化』で徹底的に否定した「絶対無」があり、その「絶対無」が（無であるにもかかわらず）自己を限定することによって時が成立するのである。西田は次のようにいう。

「時は絶対的に無なるもの、即ち永遠の今の自己限定として之に於て成立すると共に、又永遠の無の中に消え行くものでなければならぬ。」（「時間的なもの及び非時間的なもの」）

これは、いったいいかなる事態なのか。この事態を解明するために、西田が批判する、連続する「持続」だけのベルクソンの世界から、一つ概念をとりだしてみたい。「純粹知覚」だ。『物質と記憶』の末尾近くで、ベルクソンは次のようにいっている。

「実際は、「純粹」知覚、つまり、瞬間的な知覚は、一つの理想、一つの極限に過ぎない。あらゆる知覚は、持続のある程度の厚みを占め、過去を現在へと引きのばし、まさにそのことによって記憶にあずかっているからだ。」（*Matière et mémoire*, p.274）

この「純粹知覚」は、ベルクソンの『物質と記憶』で提示された「イマージュ」が覆う二元論的世界の「なか」には、けっして登場してはいけないものである。知覚と記憶が融合した「イマージュ」に満ちているこの持続世界において、「瞬間」やただの（純粹な）「知覚」の居場所は、ないはずだからだ。では、「一つの理想、一つの極限」とは何か。

ここに西田の「絶対無の場所」への隘路を見だし、西田の世界像（主に『無の自覚的限定』において叙述された世界）とベルクソンの世界像（『物質と記憶』で提示された世界）とを比較検討してみたい。